

日本の文化や伝統のうえに立つてまちが発展していくプロセスを見せるのが観光。地域の人たちの思いがプロセスの中にどれだけ詰まっているか。それが来た人を感動させる。

株式会社ベネッセコーポレーション
代表取締役会長 兼 CEO

福武 総一郎さん

「ベネッセは、香川県直島に「ベネッセアートサイト直島」を作られています。また、直島は2008年の日仏観光交流年の重点地域にも設定されていますが、そもそもどのようなきっかけで地域づくりに取り組むことになったのでしょうか。

「良い地域に住まないと、一人ひとりが良く生きようと思っても幸せにならない」

私が40歳のとき、父が直島にキャンプ場を作る計画を進めているさなかに亡くなり、プロジェクトを引き継いだのですが、この直島で、現代社会が置き忘れた精神的豊かさを非常に強く感じました。これをきっかけに「良く生きる」とはどういうことだろうかと考えるようになりました。

また、西洋史学者の木村尚三郎さんと瀬戸内海の風景の研究をされている西田正憲さんの考え方にも後押しされ、どうすれば幸せになれるのだろう、良く生きられるのだろうと考えたとき、やはり良い地域に住まないと、一人ひとりが良く生きようと思っても幸せになれないと思い、地域づくりに取り組むことになりました。

これまで教育の仕事に携わってきました。



家プロジェクト「護王神社」
杉本博司：Appropriate Proportion
撮影：杉本博司



草間彌生「赤かぼちゃ」
撮影：渡邊修



家プロジェクト「角屋」
宮島達男：
Sea of Time '98
撮影：上野則宏

(写真提供：ベネッセアートサイト直島)

たが、競争によって成長するのではなく、年を取れば取るほど幸せになるようなサービスを提供したいと考え、1990年にBenesseという概念（リテン語のbene（よい、正しい）+esse（生きる、暮らす）を一語にした造語）を造り、95年に社名変更もしました。

「子どもやお年寄りに目を向けるのが
本当のまちづくり」

直島プロジェクトは、ベネッセの理念を具現する場所として、日本が世界に誇る最も美しい場所である瀬戸内海に置くという発想から始めました。

今までのまちづくりは若者に目が向いていましたが、子どもやお年寄りに目を向けるのが本当のまちづくりです。直島はお年寄りばかりの孤立した過疎の島で、古い民家も壊れかけていますが、そのような中に、最初から世界に注目されるような、子どもからお年寄りまで幸せに暮らせるまちを作りたいと思ったのです。

「ベネッセアートサイト直島」には、特に外国人が多く訪れ、来島者のうち10%位を占めるといふことです。

瀬戸内海には産業廃棄物の問題など、近代化のための負の遺産もある一方で、日本の原風景が残っています。

直島では、世界にも類のない、現代アートに囲まれて宿泊するというプロジェクトを進めてきました。直島には現代社会が抱えている矛盾や課題が込められたメッセージ性のある作品が置かれており、ただ景観が良いというだけでなく、自然との対比と調和が世界の人々を惹きつけるのでしょね。

海外から人が来ることで、日本人が日本の良さを再発見することができまし、これまで、外の人との付き合いがなく、自分たちだけの世界だったところが、若者や世界の人たちと交流することにより、まちが綺麗になり魅力が向上するという相乗効果もあります。

日本にはまだまだたくさん良いところがあると思いますが、何を使って地域を再生するかを考えたとき、人を元気にするのは現代アートであると、アートディレクターの北川フラムさんと越後妻有と一緒に、行ったプロジェクトでも感じましたし、現代アートを使うこと以外で、自然の豊かな過疎地を再生する方法はなかなか見つからないのではないかとも思っています。

「あるものを活かして、ないものを作る」

今までのまちづくりは、高層ビル建設



瀬戸内海の夕焼け(『金色の海』船から見る風景100選より)

のように、「あるものを壊して、ないものを作る」というもので、我々が築いたものを次世代の人が壊してしまう、経済優先型の非常に危険な文明史観であると思つたのです。

経済は文化の僕にすぎないと思つています。「あるものを活かして、ないものを作る」という発想のもと始めた古民家の再生は、いまや全国に普及しています。自然や歴史が地域の文化を創り、そこから新しい何かが生まれるのではないのでしょうか。

―地方によっては、町並みが画一化されている印象を持つようなところも少なくない気がします。

今までの観光は、アミューズメントパークの失敗に見られるように、安易に諸外国のものを持つてきた日本人のためのものでしたが、直島のプロジェクトは最初から世界の人を呼び込むことを考えてきました。湯布院や黒川温泉(熊本県)が成功しているのも日本の良いものを残しているからであつて、外の人が喜んでくれて自分たちも喜ぶ、世界に通用する地域づくりを最初からやらなければならぬと思ひます。

最近感じるのはですが、魅力のあるものやおいしいものは地元においておくべきだと思ひます。見事に実現しているのは愛知県の知多半島の先にある日間賀島(ひまかじま)で、おいしいフグ・タコを地元で食べています。そこでしか食べられないということで、今では年間30万人の人が訪れているそうです。

地方にはもともと魅力があるのに、異物をどんどん入れて自分たちの魅力を壊しているのではないのでしょうか。コンビニがないまちが良いまちであるともいいます。立ち止まって考え直し、地元の良さをよく見ることが必要です。

直島における仕掛けは現代アートですが、これからの地方都市では路面電車の環状化がよりよいまちづくりに最も有効なことだと思ひます。路面電車の環状化によるにぎわいの創出や車社会からの転

換、環境などいろいろな意味も含め、市民が共通認識を持つて、合意形成が得られればどんどんまちづくりが進んでいくと思ひます。

観光とはできたものを見せるのではなく、日本の文化や伝統の上に立つてまちが発展していくプロセスを見せるものです。地域の人たちの思いがプロセスの中にだけ詰まっているか、それが来た人を感動させ、どう発展していくのかを見るためにまた訪れることになるのです。

―今後の観光行政への期待をお聞かせください。

「我々や地元の人たちが気づいていない地方の良さを観光庁がどんどん探し

出して海外で紹介していただきたい」

ただ観光の人口を増やすためだけでなく、地方の再生のためにも観光庁ができたのだと考えています。

海外の人が関心を持つている場所や日本の魅力をどんどんPRし、お客さんに来てもらい、感動して帰ってもらいたい。それが、日本の再発見にもなりますし、他の地域にも波及することになれば良いですね。

我々や地元の人々が気づいていない地方の良さを観光庁がどんどん探し出して海外で紹介していただきたい。紹介していただいたことではその地域がどんどん元気になっていくのではないのでしょうか。

聞き手 池光 崇(広報課広報企画官)



Profile ふくたけ そういちろう

早稲田大学理工学部卒業後、(株)福武書店東京支社勤務を経て1986年5月同社代表取締役社長就任。1995年に社名をベネッセコーポレーションに変更、2007年(株)ベネッセコーポレーション代表取締役会長兼CEO就任。1987年から直島プロジェクトを開始し、香川県直島を自然とアートで活性化する取組みを実行。2004年「香川県直島名誉町民」受章。2006年、直島での継続的なアート活動に対して「メセナ大賞」受賞。2008年に今後の観光行政のあり方の意見交換を行うため国土交通省に設置された「観光に関する懇談会」のメンバーを務めた。